

もみじ

—広島山岳・スポーツクライミング連盟会報—



一般社団法人 広島山岳・スポーツクライミング連盟

〒733-0011 広島市西区横川町 2 丁目 4-17

電話・FAX (082) 296-5597

E-Mail: hgakuren@lime.ocn.ne.jp

URL: <http://hiroshima-gakuren.or.jp>

郵便振替口座 01380-6-37958

題字デザイン 今村みずほ

編集 西部伸也

本号内容

1. インターハイ (8/7~11 北海道十勝連峰・大雪山系) 選手感想文
2. 山岳・SCセミナー (9/9 西区民文化センター) 報告
3. 中国高校登山大会県予選 (9/9~10 宮島) 報告
4. 山岳コーチ1養成講習会 (9/24 三篠公民館) 報告
5. クライミングスクール (10/1 天応烏帽子岩) 報告
6. ありんこチーム活動 (8/19 奥三段峡) 報告
7. 岳連短信 (寄贈御礼、10~11月の行事予定)

1. インターハイ選手感想文

(広島学院高校登山部顧問 下前 知義)

前号で報告があったインターハイの選手感想文です。

『北海道インターハイに出場して』

(広島学院高等学校二年 一丁畑 零)

今大会のメンバーは、高2が一丁畑(CL)、岸田(SL)、平岡(M1)の3人、高1が奈良定(M2)の1人となっていた。開催地が北海道ということで4人ともとても楽しみにしていた。また、昨年先輩方が優勝という素晴らしい結果を残していたこともあって、優勝目指して頑張ろうとみんな気合いが入っていた。

1日目は、開会式、ペーパーテスト、設営審査、炊事審査があった。開会式が始まるといよいよかと高揚感を感じた。最初の審査はペーパーテスト、ここは落とせない、みんな満点を取ることを目標にテストを受けた。しかし、いざテストが始まってみると、緊張も相まってか順調には進まなかった。その結果、みんな何かしらミスをしてしまった。目標に近いとはいいがたい結果でかなりショックだった。しかし、これを設

営審査と炊事審査には引きずるわけにはいかない。気を取り直して残りの2つの審査に臨んだ。その甲斐あってかそれらでは失点はなかった。

2日目、いよいよ山行が始まった。しかし、生憎の天気でルートは変更になり、隊行動で本来のルートの途中までの往復となった。山行中は雨で地面が滑りやすくなりかなり注意が必要だった。それに加えて他の学校とも間が空きすぎないようにしなければならないが、下りなどで間が空いてしまう場面が少しあった。隊行動の難しさを実感する山行だった。また、この日は午後から雨が酷くなり、テントで泊まること出来ず、近くの高校の体育館で泊まることとなった。

3日目、この日は朝の準備時間が短く、集合時間に遅刻しないようみんな気をつけていた。僕は朝が苦手なので、間に合うか心配だったがなんとか間に合ったので良かった。この日は2日目とは打って変わって良い天気だった。この日のコースでは稜線の上を歩く所があり、そこから見える景色はまさに絶景で大会での疲れも吹き飛ばすようだった。北海道の雄大美を肌で感じる事の出来る気持ちの良い山行だった。

そして迎えた4日目、最後の山行では北海道最高峰の旭岳を登る。4人とも旭岳山頂で綺麗な景色を見れることに期待しながら登った。この日も天気は良く山頂へ登ると雲間から青空が見えた。下りでは雲はだいぶはけていて美しい景色だった。そうして大会の全ての山行を4人揃って無事終えることが出来た。ふもとに戻って残っていた審査物が返却された。審査物の中には予想外の失点があった。記録書で0.6点の減点。みんな驚いたが、記録書担当である岸田はもっと驚いていた。もう審査は全て終わっていてどうすることも

出来ないで、せめていい結果、上位入賞以上であることを願ってその日は終えた。

そうして迎えた大会最終日。今日、順位発表があると思うと、とても緊張したし怖かった。迎えた閉会式での順位発表、そこで広島学院の名前が呼ばれることはなかった。結果は 8 位。順位が 2 桁であることも覚悟していたがそれでも上位入賞さえ出来なかったのは本当に悔しかった。全体を振り返ると、今回の大会は準備も含めもっと減点を減らすことが出来たのではないかと感じている。例えば、ペーパーテストももう少し入念に準備をしておけば減点を減らせたろうし、記録書の減点も大会の資料をもう少ししっかり確認しておけば減らせたろう。だが、これらの確認不足も CL である僕自身が原因だと感じている。というのも、僕の担当する計画書関係の準備がギリギリになってしまったことで、他のメンバーに手伝ってもらうはめになってしまったからだ。情けない CL で本当に申し訳ないと思っている。しかし、今回の大会で得た経験もたくさんある。これらはこれから後輩たちにしっかり繋いでいきたい。

最後に、今回の大会をこの 4 人のメンバーで準備して出場することが出来たのは本当にいい思い出となった。それと同時に僕の青春の最高の 1 ページでもある。またこの 4 人で山を登りたい。

2. 山岳・SCセミナー報告

(理事・国際部 加登本 仁)

9 月 9 日 (土) 広島市西区民文化センターにて、「山岳・スポーツクライミングセミナー2023」が開催されました。『サバイバル登山家』として有名な服部文祥氏を招いた講演会で、52 名の参加がありました。服部文祥氏をお招きするのは 2008 年以来、15 年ぶり 2 度目となります。開場時刻の 17 時 30 分には次々と参加者が列を作り、会員のみならず兵庫県、岡山県など県外からも参加者がありました。お子様連れも 2 組ほど。半数は当日申し込みでした。開始の 18 時を待たずして服部氏は書籍販売コーナーの横でサイン会を開いてくださいました。主催者はサイン会を企画していなかったものの、ご自身の SNS で参加の呼びかけやサイ

ン会の実施を予告されていたようです。県外の参加者は、服部氏のInstagramやTwitter (現: X) の書き込みを見て参加された方々。開始ギリギリまで写真撮影や談話を楽しんでおられました。発売前の最新の著書も販売されていました。

講演会は山田会長の挨拶、豊田理事長による講師紹介の後、服部氏の講演がスタートしました。「廃村サバイバル」というテーマではありましたが、ご自身の学生時代から K2 登頂の話、サバイバル登山を始めた契機、メディア取材も兼ねた津々浦々でのサバイバル生活、現在の廃村生活に至るまで、写真とともにご自身の生き様や人との出会い、自然や命との向き合い方など、時にユーモアも交えて熱く語っていただきました。内容を少し紹介します。

26 歳の時に K2 登頂、そこでベースキャンプまでの荷物を運ぶポーターを見て、「人の手を借りて山に登ること」に違和感を覚える。自分たちは K2 サミッターとして注目されることになるが、ポーターの彼らの生き方の方がよほど尊いものであり、果たして自分は「自力」で山に登っているのか、「自力」で生きているのかと自問自答するようになった。その思いを体現すべく、日高山脈でサバイバル登山を始める。イワナを釣り、さばき、食べる。命あるものを自らの手でころし、自分の血肉とする。食糧を得た喜びと、命を奪うことの申し訳なさが共存する。この複雑な感情は、現在に至っても常に抱き続けているものである。その後、肉についても同じ考えで、狩猟を始める。自然の中で、生身で生きている彼ら (シカなど) に対して、鉄砲という圧倒的暴力を携えた人間が、命を殺めていいのか、いつも考える。殺気むき出しでは獲物も逃げてしまう。撃つためには、彼らの気持ちや行動に寄り添い、親近感を持つ必要がある。しかしそれがまた、先の葛藤につながる。急所を外しても、撃たれたシカはやがて動けなくなり、どこかで死を迎えることになる。自分も 40 代後半で膝を悪くし、肉体のピークがとうに過ぎていることを実感する。手負いのシカと同じで、「ゆっくり死に向かっている」現実と向き合わなければならない。NHK の企画で行ったツンドラで出会ったミーシャ、インドにブラウントラウト釣りに行った時に見かけ

た現地の羊飼。文明に頼らない彼らの生き方に恥ずかしくなると同時に、自分の生き方・考え方を肯定された気がした。鉄砲と犬のナツだけで北海道を縦断する、廃村、古民家を手に入れて「そこにあるもの」で生活する。「自分の力で生きてみる」ことがおもしろいのだ。そのおもしろさに気づいてしまうと、やらずにはいられない。10月からまた北海道に行く予定がある。「本当に『生きる』とは」、「地球に生き物（ホモサピエンス）として『在る』とは」。正解のない問いを胸に、服部氏の旅はまだ続く。

あっという間の 90 分でしたが、質問タイムには県外参加者から多数の挙手があり、時間が足りないくらいでした。急いで「お楽しみ抽選会」も実施しました。比婆スカのTシャツやトートバッグ、松島さんから寄付していただいた『ちゅうごく山歩き』10冊など、50点近くあったので、ほぼ参加者全員にお渡しすることができました。スタッフが慌ただしく会場の撤収をしている中、会場外では服部氏を囲んでサイン会や質問タイムの延長戦が 20 時頃まで続きました。それから事務所経由で歩いて「横川食堂」に移動し、懇親会を行いました。一人ひとりの自己紹介や感想に対して、丁寧にコメントされる服部氏の温かさが印象的でした。



3. 中国高校登山大会県予選報告

(県高体連登山部事務局長 内藤 弘泰)

令和 5 年度 広島県高等学校登山大会 (第 63 回中国高校登山大会県予選) の報告をします。

令和 5 年 9 月 9 日 (土) ~ 10 日 (日)

広島県廿日市市 宮島町 包ヶ浦・弥山一帯

選手参加 10 校, 108 名 役員・監督 23 名

世界的観光地である宮島の、包ヶ浦キャンプ場を幕営地として大会を行いました。

1 日目の正午に開会式を行った後、登山技術や知識の講習会とペーパー試験を行いました。キャンプ場周辺の鹿のファミリーがどんどん近づいてきて、目を離した隙に荷物をあさられて、食べ物を奪われてしまうという事件が頻発しました。追い払おうとした教員に、立ち向かってくる雄の鹿もおおり、たいへん怖い思いをしました。

夕方、テントを張って炊事をすませた後、広島



市街地で行われたサプライズ花火を対岸から眺めることもでき、素敵な夕暮れを楽しむことができました。

2日目は4時に起床し、朝食・撤収の後キャンプ場から出発して、博打尾を越えて、紅葉谷公園へむけて団体行動で歩きました。毛利元就が宮島合戦で奇襲に使った「ばくち」尾根の歴史にも思いをはせながら、大聖院というお寺の裏にある白糸の滝まで歩き、そこから弥山山頂直下の仁王門までタイムレースを行いました。

その後、弥山山頂を経由して、ロープウェイの獅子岩駅まで進み、ロープウェイと併走している登山道を下っていきました。このあたりから、太陽がカンカン照りになり、気温がグングン上昇し、クラクラしながらの登山行動になりました。正午すぎには全チームが包ヶ浦キャンプ場にゴールできましたが、熱中症気味で体調を崩してしまう選手が何名か出てしまい、クーラーの効いている建物で閉会式まで休んでもらいました。

しんどい思いをした選手も、頑張ってくれたことが今後につながる自信になると思います。よく頑張ってくれました。大会結果を以下で紹介いたします。

<大会結果>

順位 校名 合計点

<男子>

①広島学院 98.6 ②修道 97.5 ③安古市 95.6 ④基町 9.3 ⑤五日市 88.9 ⑥廿日市 85.1 ⑦県立広島 77.1

<男子二部>

①広島学院 B1 98.7 ②広島学院 B3 98.7 ③修道 B1 98.2 ④修道 B2 97.8 ⑤修道 B3 95.8

<女子>

①ノートルダム清心 97.5 ②五日市 90.8 ③県立広島 29.4

<女子二部>

① 五日市 82.1 ②廿日市 80.2

上位大会である中国大会は、10/27～29に鳥取県の

氷ノ山で開催されます。例年ならば6位以上が出場できるのですが、開催県の感染症対策で、各県男女3チームずつという制約となっています。男子は広島学院、修道、安古市が、女子はノートルダム清心、五日市、基町が出場権を獲得しました。中国大会での活躍を祈ります。

以下、優勝チームの感想文を紹介します。

『県登山大会を終えて』

(広島学院高等学校一年 奈良定 克拓)

9/9～10に中国大会予選(広島県大会)が行われました。先輩方が連覇し続けており、もし今年も優勝することができれば五連覇を迎えるという状況でした。インターハイでの失点を踏まえて同じ項目で減点されることがないように心がけました。とはいうものの直前の一週間で一気に大会の準備をすることとなり、慌ただしく試合が始まりました。そのためまだまだ減点されてしまうところが残っているのではないかと、という不安がよぎりました。

大会1日目は筆記テストと装備審査、設営・炊事審査でした。僕は天気図担当でした。県総体の時はあまり緊張することなく天気図審査を受けることができたため良い成績を残せましたが、インターハイの時は極度に緊張しケアレスミスをしてしまったがために0.3点の減点をくらってしまいました。その影響で今大会でも緊張しすぎてミスをしてしまうのではないかと不安がありました。実際は審査の前に緊張がほぐれたおかげで平常心で審査を受けることができました。試験が終わった頃には満点取れたなという自信が湧いてきました。そしてチームのメンバーたちにそれぞれの試験の感想を聞くと、良くない結果だと思おうという言葉と自信があるという言葉が聞きました。

続いて設営・炊事審査でした。設営は練習を重ねていたため自信がありました。それに対し炊事は今回のメンバーで練習できていませんでした。審査員から設営・炊事審査においては減点なしと伝えられたため良かったなという安堵感に包まれ、この日はよく寝れました。

2日目はついに登山行動でした。ちなみに登山行動の前にある審査物返却にて予期せぬ減点がありまし

た。この時すでに 1.4 点の減点となり優勝を逃すかもな、という気持ちがありました。

今回の登山行動は隊行動がとても長かったです。隊行動中に読図の定点を出されると止まることができなく覚えるしかないの隊行動中はずっと読図のことを考えていました。隊行動の後いよいよ特区间でのチーム行動が始まりました。ここでのタイムは県総体のようなタイムレースではなく規定時間内満点方式だったので走る必要はありませんでした。しかしせつかくなると思い、バテないくらいのペースの早歩きで登りました。一方読図に関してはかなり自信があり順調に進めることができました。そんな中休憩中に記録書ってどのくらい詳しく書けばいいんだろう、ということについてチーム内で話しました。もちろん答えが出るはずもなく少しモヤモヤした気持ちの中進みました。そして無事ゴールすることができました。

閉会式が始まる前に審査物がかえされ、この時 B1 と B3 の方が僕たちより点数が高いということを知りました。なんとも言えない気持ちになりました。僕たちは 2 日目は減点されることはありませんでしたが、やはり 1 日目の失点が大きかったため負けそうという気持ちが強くなりました。閉会式が始まり成績発表がありました。気になる結果は優勝!!五連覇を達成できとても嬉しかったです。けれども今回の大会で僕たちはかなり失点してしまっていたため中大本戦までには改善します。そして今年こそは優勝します。またインターハイで優勝した岡山操山に勝ちたいです。応援よろしくお願いします!氷ノ山楽しみです。

(ノートルダム清心高校 CL 福永真歩、SL 伊藤英恵、
M1 高橋一咲、M2 山本渚)

今大会は 1 泊 2 日、宮島で開催されました。先輩方もほぼ引退され、1 年生のみの新チームで挑みました。この 4 人体制のメンバーが決まったのが大会直前の月曜日で、なかなかハードでした。さらに大会当日、メンバーの 1 人が出場できないと判断し、F 隊から急遽 D 隊に入ることが決まりました。宮島口で必要な装備をそのメンバーから新しく入るメンバーに受け渡すことができ、何とか大会を迎えることができました。

1 日目は開会式の後、計画書を提出し、装備審査を行った後、4 人それぞれの課題テストと講習会を受け、帰ってきたら幕営地に移動し、設営・炊事審査を行うといった流れでした。開会式では選手宣誓を務めました。また、装備審査では、1 人 F 隊からの移動ということもあり、パッキングなどの面で不安でしたが、減点無しでとても安心しました。課題テストと講習会については、それぞれから一言ずつ。

CL (天気図)

お父さんの講習会を受けるのは初めてだったけれど、とても分かりやすかった。思ったより減点が多く悔しかった。

SL (自然観察)

地図記号で点を落としてしまい、点数が低く、チームに迷惑をかけてしまったので、今回は頑張りたい。

M1 (救急)

覚えきれていると思っていたが、テストを受け、自分がまだ覚えきれていなかったことを痛感した。次は満点をとれるよう努力しようと思う。

M2 (気象)

気象の勉強をする時間が短く、大変だったが、今まで知らなかったことを勉強する機会ができて良かった。

このように、それぞれが受けた後は、幕営地に移動しました。まず設営講習会があり、そこでは実際に広島学院・修道の設営を見学しました。そして自分たちも設営し、炊事ではカルボナーラを作りました。この 2 つの審査でも減点は無く、この日の審査は無事終了しました。夜 8 時から、海の向こうで行われているドリーム花火を見ることができました。

2 日目は登山行動でした。朝 4 時に起床し、朝食をとり、テントをたたんで集合場所に移動しました。前日の審査物返却の後、包ヶ浦キャンプ場からタイムレーススタート地点の白糸の滝まで隊ごとに列になって行きました。その途中に読図地点が 3 か所あり、そのうちの 1 地点が分からず、読図で 1 点落としてしまいました。タイムレースでは、2 位のチームとほとんど差がなかったため、最後のラストスパートで焦りました。大会に出て体力がないことを痛感しました。登

山行動終了後、閉会式まで他校の人と計画書を交換して交流しました。そして迎えた閉会式では、タイムレースの差があまりなかったので少し不安でしたが、D隊優勝で名前が呼ばれた時は安心しました。中国大会では優勝目指して頑張ります。



RW 獅子岩駅からの尾根を下る



2日目朝、包ヶ浦から博奕尾・白糸の滝に向けて出発



途中に読図の定点などがある



包ヶ浦で閉会式

特区間スタートの白糸の滝下でザックの計量

4. 山岳コーチ I 養成講習会報告

(指導部長 森本 覚)

令和 5 年度日本スポーツ協会公認山岳コーチ 1 養成講習会がスタートしました。(2016 年度以来実施できていなかった山岳コーチ 1 養成講習会がこの度スタートしました。)

4 月 6 日に三篠公民館で、4 月 9 日に福山市生涯学習センターローズコムにて、事前説明会を実施し 16 名の方が受講申込されました。

今年度から日本スポーツ協会で開催される「共通科目 I」は通信教育から Web 講習となり既に受講生の皆様は修了されています。

日本山岳・スポーツクライミング協会より委嘱されております「専門科目」については、9 月 24 日(日) 広島市三篠公民館研修室にて基礎理論講習を実施しました。

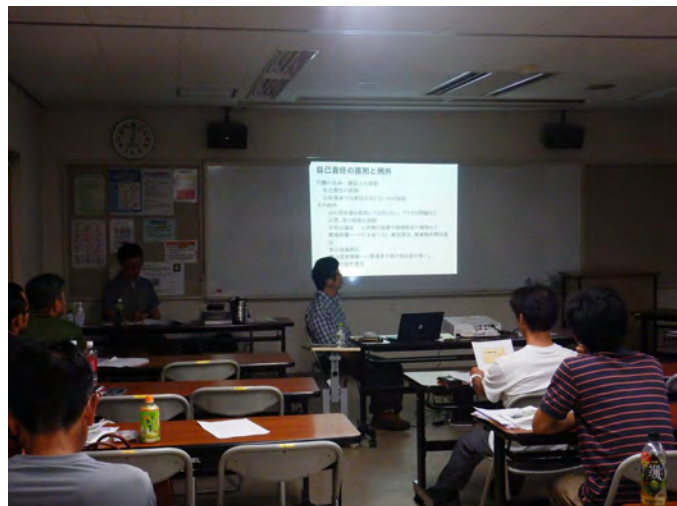
実施内容は公認山岳コーチ関係規程・検定基準の説明と公認山岳コーチ関係規程通りの合計 6 科目 (①登山計画、生活技術、自然保護、②登山医療、③遭難対策、④山の気象、⑤ナビゲーション技術、⑥指導者制度、リーダーの法的責任) を無事研修できました。

この後のスケジュールとしては、10 月 21 日～22 日に三倉岳で無積雪期の実技講習と実技検定、1 月 20 日～21 日に比婆山で積雪期の実技講習と実技検定及び理論検定を予定しております。全員合格を目指して頑張ってくださいと思っています。

(写真提供 森本)



山田会長挨拶



溝手弁護士の講習

5. クライミングスクール報告

(指導部長 森本 覚)

第 6 回 10/1(日)

山城：天応烏帽子岩

人数：21 名 (スタッフ含)

銀座尾根でマルチピッチと第 2 フェイスでショートルート 4 本のトップロープクライミングを 2 組に分かれ午前午後交代で行いました。(指導部 塩田 徹)

【感想文】

(受講生 上村 信行)

(前置き) クライミングとの出会いは、突然やって来た。数年前、三倉岳の登山道脇で、老紳士と御婦人(後で、〇〇氏と△△氏だと解る)が、岩壁に取り付いているところに偶然遭遇する。一体こんな岩場で何をやっているのか、しばし目を疑う。かねてから、クライミングというスポーツに対して多少の関心を持っていたので、両氏に対して、この技術を習得するにはどのようにしたらよいのかを尋ねてみた。すると、講習会の募集が毎年あるとのこと。「クライミングの技術は、登山にも応用できるので受講していても役に立ちますよ。」とご丁寧にお勧め頂いた。なんとも甘美な誘いであった。その後、その言葉に背中を押される形で、受講することになる。これが甘かった。いざ受講してみるとマジでガチの講習会ではないか。そもそも、受講者には経験者や複数回受講者も多く、全くのド素人には、いささか敷居の高い場所であった。しばらくの

間は、受講希望した自分自身を呪うことになる。その後、課題が進むにつれ、絶望感と少しばかりの達成感を繰り返しながら、身の丈にあったレベルでのチャレンジを淡々とこなすことになる。課題を重ねる毎に用具の扱いにも慣れ、登攀スキルの上達度は低いが、クライミングの楽しさや難しさが多少なりとも解りかけてきた。

さて、ここからが本題の今回の感想文：講習は、今回が6回目で、残り2回となった。課題的には、総仕上げの段階に近づいてきている。課題の場所は、初の天応エリア。花崗岩質ではあるが、三倉岳と違って、幾分ゴツゴツとした岩肌といった印象。また、瀬戸内海を見渡せる眺望は、開放的な気分させてもらえるが、それは一瞬だけであって、与えられた課題に向き合うだけで精一杯、景色を堪能する余裕などまったくない。真面目な生徒である。

今回の課題は、大きく2つの課題に分かれた。一方は、マルチピッチを想定したメインロープでのビレイ課題と懸垂下降訓練。もう一方は、トップロープによる登攀訓練となった。

メインロープでのビレイ課題では、今回事前にその手技に関する動画が配信され、幾分予備知識を持った段階での実践となった。この動画による解説は、非常に解りやすく有益だと感じた。いざ、実践してみると、机上の理解と現場とでは、緊張感もあり想定した以上に手技が上手く行かず時間もかかった。繰り返しの訓練が必要だと痛感する。懸垂下降の課題では、恐怖感を克服しながらなんとか下降できた。下降前のセルフビレイとロープ投げで、もたつく。これも訓練が必要だと痛感した。ただ、高所で火災が発生した際、20mぐらいなら自力で降りられるぐらいの自信が多少ついた。

トップロープによる登攀は、4課題が設定された。半分は、核心部分にクラックのある課題であった。三倉岳とは違った表情の岩との格闘となり、新鮮な気持ちで課題と向かうことになるが、苦手であるクラックは、克服できずに今回も終わることになった。手足が痛い、デカイ身体がクラックに入らない、忍耐力が無い。クラックを克服するには、技術と根性がまだまだ

未熟である。

最後に、講習会は残り2回となったが、ド素人の私に対して丁寧かつ粘り強くご指導頂いた講師の方々に深く感謝申し上げます。何気ない雑談も今後のためになる事が多く、つくづく受講して良かったと感じています。また、一緒に課題に向き合いながら、サポートして頂いた受講生の皆様にも、感謝申し上げます。

クライミングは、自然に向き合うスポーツです。それ故に常に危険を伴い、細心の注意とリスク管理が求められます。また、ビレイヤーとの信頼関係の上に成り立っているものでもあります。この講習会を通して、自然に対して謙虚に向き合う姿勢を学ぶとともに、人としての配慮の大切さを再認識致しました。残り2回も引き続き頑張ります。

(写真提供 塩田)







6. ありんこチーム活動報告

(顧問・個人会員 岡谷 良信)

参加者の感想文と写真です。

『チームありんこ 8 月奥三段峡沢登り初体験記』

(個人会員 大下 真弓)

8 月 19 日 (土) 7 時半に道の駅とごうちの向かいの駐車場に集合、3 台に便乗で奥三段峡へ。

沢登りの装備を身につけ準備万端、男性 8 名、女性 4 名で 8 時 40 分、田代出合から奥三段峡へ出発。私は人生初の沢登り、事前に装備、沢靴、服装、冷えないために温かい飲み物 (水筒) 等を教えていただいた。前日から緊張気味、皆さんについて行けるかな、怪我しないように、迷惑かけずに下山しなくては。

集合場所でコース (田代出合～奥三段峡～中の甲林道～イキイシ谷下る) と注意事項の説明を受けた。その時「今回が沢登りはじめての人は?」「は～い」やはり私だけ、緊張が増す。でもベテランの岡谷さん、久保田さん、経験豊富な方々の適切なアドバイスをいただき緊張もほぐれ、沢登りスタート。

しかし沢に行くまでのトラバース道、滑る、急勾配、下は崖…フックスロープにカラビナで安全確保しながら歩く。

さ～あ、いよいよ沢「冷た～い! あれ? 思ったほど冷たくないぞ」気持ちいい～! 徐々に腰まで、服のままの水の中は不思議感覚だ。バランスいいベテランの方は普通にスイスイ歩いている。私はおどおどと歩いている。ゆっくり歩くのに滑る、つまずく、沢の流れに身体を持っていかれる始末、「何で?」。すると「あえて流れを身体で感じている」と言われた。沢を渡るとき水面から一番近い石のてっぺんを歩くと流れを感じにくい、石の下流側を歩く方が流れの抵抗を受けにくいなど、体験することで理解ができる。

いきなり滝が目の前に… (どこ登るの? 水の量すごいよ…え～? そこまで行くの…) うろたえ状態。先行の方がフックスロープ設置して下さる。ロープの下に行くまで淵をへつりながら移動。水から出たいが出れない。補助してもらい岩の上に立つが、ここからの移動が難儀な状況。「重心を右足に」と声をかけられる。(ほんと! 重心の移動ができた。え、身体が安定した。) 滝の横を登りきる。岩が巨大、谷底も岩盤、木々も巨大、大自然の中にいる自分、滝の音も凄まじい勢いで五感に響く。穏やかな流れの時は、ゆっくりとした時間。木々の合間から陽が差し込み、水面がキラキラ反射する。しばらくの休憩。

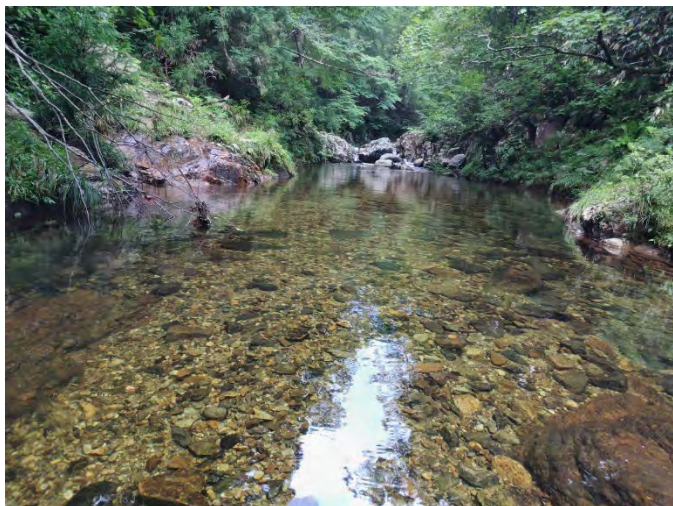
再び歩きはじめる。さあ、最後の難所が現れた、堤防前の大きな滝 (お岩淵の滝?) ここでも先行の方の働き、フックスロープで確保。吸い込まれそうな深い色、両側は巨大な岩、迫力満点の滝壺にまっしぐらで川の中を泳ぐ (引っ張ってもらったのが現実だが)。深いところはやはり冷たかった～あ～、滝も無事に登ることができた。

ほっとしてところに、「蝶が止まっているよ、動かない、あ、産卵始めてる」のハプニング。私のピンクのヘルメットに卵を、「何で?」「アザミの花に産卵する蝶だ、とか、勘違いしたのだろうか (気の毒な蝶、ごめんなさね、連れては帰れないよ。)

中の甲林道あるき (おしゃべりタイム) 疲労のために脇道を下る。16 時過ぎに田代出合に無事下山。

帰り道いこの村のお風呂、汗を流し、温まり、着替えてすっきり、皆笑顔と安堵感。

皆さんのおかげで今回も貴重な体験をさせていただきました。チームありんこの山行は、和気あいあいとして優しい気持ちになれています。ありがとうございました。



7. 岳連短信

1. 寄贈御礼

9/20 三原山の会『筆影』No. 523 (10月号)

9/22 福山山岳会『会報』10月号

(9/25) 広島やまびこ会『やまびこ』802 (9月号)

(9/29) 広島山稜会『峠通信』771 (9月号)

2. 10～11月の行事予定

10/25 全員協議会 (西区民文化センター)

10/27～29 中国高校登山大会 (鳥取県氷ノ山)

10/28～29 パラクライミング ジャパンシリーズ第1戦 (福山 エフピコアリーナ)

11/4～5 広島地区高校新人大会 (CERO・三倉岳)

編集部より

○この会報は、皆さんの提出原稿を編集して発行しています。岳連行事・山の情報・行事参加の感想など気軽にお寄せください。寄稿の場合は所属、役職を記入下さい。編集の都合で一部手直しすることがあります。ご了承ください。

○会員団体で会報発行されたら岳連事務局まで恵送下さい。随時紹介します。

○この会報はメール配信しています。配信ご希望の方は岳連事務局までメールアドレスをお知らせ下さい。